

パソコンによる言語地理学

福嶋 秋子

昨今普及がめざましいパソコンを利用した言語地理学の方法を紹介したい。このために開発したシステム SEAL (System of Exhibition and Analysis of Linguistic Data) と J.C.O. SEAL は NEC の PC-801 のもとで動くようになっていた。コンピュータ本体の他に、ディスプレイ、プリンター、フロッピーディスクを使う。

従来の言語地理学では、調査票あるいは資料カードを見ながらハンコを押して地図をつくっている。語形の統合のしかたを変えたり、ハンコを変えたりするときは、また資料にもどってやり直しである。慣れば多少早くはなるが、この手間はばかにならない。また、書き直すたびに押しまちがいなどのミスが出る可能性がある。

しかし、SEAL では、まず項目ごとのデータをつくり、そのデータ・チェックをしたあとで、地図化に移る。これこれの語形に何番の符号を与えるという指定をすると、画面に描かれた白地図に符号がプロットされていく。画面上の言語地図が満足できるものであれば、プリンターで印刷する。この手順を指定を変えて繰り返しさえすれば、一つのデータからいくつもの地図が簡単にできる。最初のデータづくりの間は、手作業でできるだけ細かく区別した資料図をつくるのと同じぐらいだが、そのあとは地図化の指定を正確にすることさえ気をつければよいのである。

SEAL で作成した地図の例を示しておく。パソコンのグラフィック

ク機能を駆使したので、町村界が入り、漢字や発音記号が使える、好みの符号が選べるようになっていた。図1は出雲西南部における「きのこ」の地図である。昭和五十四・五年に埼玉大学の柴田武教授を中心とするグループが文部省科学研究費により行った調査の資料によっている。

SEAL により複数項目を総合した地図化ができる。手作業でも音韻項目などは一方の特徴を数えてその頻度を地図化することができるが、項目数がふえたり様々な語彙項目を総合するとお手あげである。こういう仕事はコンピュータ向きなのである。分布が大体一致する音韻項目を総合するばかりでなく、境界線が少しずつ違う A B 型分布の語彙の地図十数枚を総合すると、分布の広がりかたの濃淡がはっきりとえられ、思わぬ地域差が浮かびあがってくることもある。図2は開音類の広がり程度の地図化したものである。出雲方言的な a…類を白丸で、山陽方言的な…類を黒丸で示し、丸の大きさで相対的な使用頻度を表している。^注

注 福嶋秋子「出雲における開音類の分布とその総合化—パソコンによる言語地理学の一例として—」『言語学演習'83』八東京大学文学部言語学研究室Vに掲載予定。

〔補〕 福嶋さんは「パソコンによる言語地理学へのアプローチ SEAL ユーザーズマニュアル」(自家版・非売品、'83年2月刊)という冊子をまとめられた。同書ではプログラムも公開されている。興味をおもちの方は、福嶋さんあて連絡してほしい。福嶋さんの連絡先は左記のとおり。

地図作成以外の研究分野でも、パソコンを利用することが今後あれこれと考えうらと思う。刺激になればと考えた。

宗賢)

連絡先 : Mrs. Chisuko Fukushima
 c/o Dr. Y. Fukushima
 St. Anthony Falls Hydraulic Laboratory
 University of Minnesota

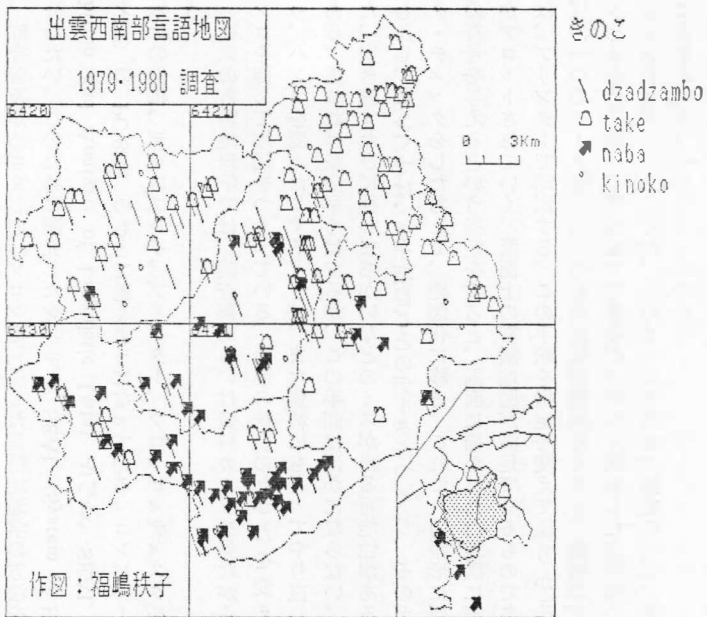


図 1 単一項目の地図化——「きのこ」の地図

Mississippi River at 3rd Avenue S. E.
 Minneapolis, Minnesota 55414 U. S. A.
 (昭和五十八年三月二十三日 受理)

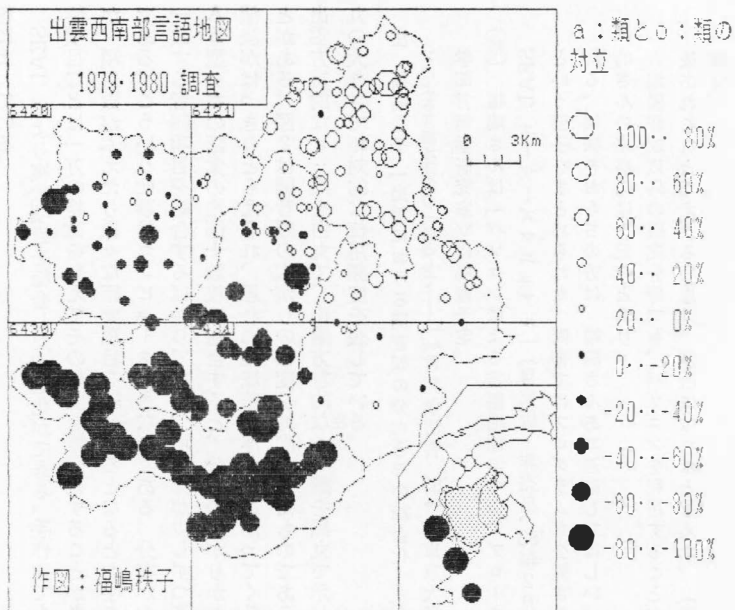


図 2 語彙項目における開音類の分布の総合図